

第12回矢作川『川会議』ディスカッション 「矢作川の今物語」

司会進行：矢作川水族館長 阿部 夏丸

○司会（洲崎） これより後半のディスカッション「矢作川の今物語」を会場の皆さんと一緒に進めてまいりたいと思います。

コーディネーターを、作家の阿部夏丸さんをお願いいたします。
阿部さん、よろしく願いいたします。

○阿部 こんにちは。阿部・矢作川・夏丸です。よろしく願いします。

今、川端さんの話をお聞きしまして、いいことを聞いちゃったなと。これからこうやって人前ではあいさつしようと思っっています。川端さん、どこに見えます。使わせてもらっていいですか。ありがとうございます。

こういう紹介の仕方というのは、ありだなということを以前から思っただけなんですけれども、すぐ忘れちゃうんですね。やっぱりこういうのをくせにしないといけないと思います。皆さんもよかつたら、名前の中に川を入れてみたらいいかなと思います。

せっかくだから、ついでに、これはさっきも紹介のあった川端さんの本の紹介。いい本です。ぜひ買って下さい。まだありますから。

僕が言うのも変なんですけれども、僕は自分で本を書いているものだから、人の本を紹介することなんて普段は絶対ないです。あり得ない。でも、今日はちょっと気分がいいので紹介させていただきました。一言言っておきます。本というのは内容じゃない。買えば幸せになれます（笑）。これは書き手の実感ですね。読まなくてもいいから買えば幸せになれるんで、皆さん、ぜひ買って下さい。

それでは、去年、この場所で「矢作川今昔物語」ということで昔の矢作川のお話を皆さんからいっぱいしていただきました。僕のような若い者にとっては、若いと言っても五十でですけども、うらやましい話がいっぱいあった。そのときの話を、ちょっと宮田さんに話していただきたいなと思うので、よろしく願いします。

宮田より

「矢作川の今昔物語」発言内容の紹介

（詳細は矢作川研究No.16を参照）

○阿部 ありがとうございます。去年、「矢作川今昔物語」ということで、昔の話をいっぱい聞かせていただいたんですけども、去年も参加された方、ちょっと手を挙げてみてください。（挙手あり）

では、皆さん、かなりご存じですね。

僕自身のそのときの感想は、やっぱり僕らの先輩は楽しいことをやって遊んでいたんだなあ、特に印象に残っていたのは、川を下ってくるときに、つるつるの石の上を流れてくると、腹を、つるつと石が滑って気持ちよかったという、すごいリアルな話とか、木の橋ができて、その橋からまたま一人、子供が落ちたと。今だったら大騒ぎですよ。ところが、子供が落ちたのが面白そうだからみんなで飛び込むようになって遊んだという、いい時代ですよ。そういう話をいっぱい聞けてすごく楽しかったのと同時に、ちょっと悔しかった。では、これからどうしていったらそんな遊びが復活できるのかとか、今後、矢作川はどういうふうみんなが遊べるよう

につき合っていくといいのかという話を、今日皆さんとしたいと思っいます。

ちょっと先に聞きたいんですけども、去年話してなくて、私はこんな遊びをしたよ、もっと話したいよという方がみえたら、ちょっと手を挙げてみてください。ほかにこんな遊びがあったよという。

いいですか。では、ゆっくりいきましょう。

去年の話の中で、皆さんにお伺いしたいんですけども、水泳大会という言葉がよく出てきたんですね。小学校になるのかな、皆さんが子供のころに川で水泳大会をやったという時代の方、やった経験のある方、ちょっと手を挙げてみてください。（挙手あり）

それだけですか。年齢を見ればわかりますよ（笑）。ちょっとその当時の話を伺わせていただけませんか。よろしく願いします。どんな場所で、どんな水泳大会をやったよという話を。

去年、このすぐ前で、先生が舟に乗って、子供はその周りを泳いでいたという話をされた方は、今年は見えていませんか。見えていないですか。去年の僕の記憶だと、ちょうどその深いところを、先生は舟に乗って、子供は足のつかないところを、必死でその前を泳ぐと。溺れると先生がつかまえるか、舟のへりに手を掛けると。素晴らしいですね。

では、ほかに上流のほうでも水泳大会をされていたと思うんですけども。

はい、よろしく願いします。

○新實 矢作自治区の水辺愛護会をやっております。百月ダムというダムがあるところなんですけれども、そのダムの近くに築平小学校というのがありまして、子供時分、学校にはプールがありませんので、それこそ昭和25、6年ごろ、小学校の水泳大会というのが、たまたまダムの水門を開ける下は、あれは30mぐらいあるのかな、25mぐらいかもわからんけれども、そこがもうちょうどプールみたいにできているんですわ。夏は、ほとんどダムのゲートを開けませんでしたので水が温かいわけなんです。そこでみんな学年別に行って水泳大会をやった。たまたま浅いところと、深いところは3mぐらい深さがあるんですけども、片方は2mぐらいの深さしかないところなんですわ。そういうところで、低学年と高学年に分かれて水泳大会をやった覚えがあります。

○阿部 今で言う、ダムの下立入禁止区域になっている場所ですね。

○新實 そう。今では立入禁止ですけども、その当時は、有効利用でやっていましたんですわ。立入禁止ではなかったものですから。

○阿部 当時の水泳大会というのは、ただ泳ぐだけが目的で。

○新實 うん、泳ぐだけが目的だった。全然泳げない子も、先生がみんな連れて行って、浅いところで泳ぐ練習をした、そういった

経験もあります。

○阿部 ありがとうございます。百月ダムの下、そのダムを使ったプールですね。そこで泳いだということですね。

ほかに、枝下のあたりではどうですか。ほかの場所でもいいですけれども、昔の水泳大会の話。

ほかにないですかね。

では、皆さんちょっと頭の中で、いつぐらいまでかなって。その水泳大会っていうのは、いつの時代ぐらいまでやってみえたんでしょうか。最後の水泳大会っていうのは、いつなのかなということ、僕、ちょっとふと思ひまして。

こっちからちょっと振ってもいいですか。新見克也さん、僕、以前、お酒飲んで話をしているときに、子供のころ矢作川で水泳大会があったという話を聞いた記憶があるんですけども、泳いでいましたか。

○新見 僕が43年生まれで、それで小学校のときなので、多分昭和50年代のころに、うちの親父たちが『月刊矢作川』という雑誌で主催していたと思うんですけども、広瀬の広梅橋の下で水泳大会が2年ぐらいあって、それで僕、矢作川で泳ぐようになったんですね。

○阿部 その当時っていうのは、学校にプールはありましたか。

○新見 もちろんありました。

○阿部 あってやっていたんですね。

○新見 僕、この辺の学区なので、この辺はもう絶対泳いじゃいかんっていうことになっていて、学校で。あそこの波岩のあたりで何人も死んでいたんで、この辺では泳いじゃいけないと。そしたら、まだ広瀬ではみんな泳いでいましたね、子供たちは。

○阿部 ああ、そうですか。ありがとうございます。昔、川でみんな泳いでいた時代があったんですね。どこかで、もうやめなさいとかあったんですかね、何で川からみんな上がるようになったんでしょう。例えば、学校から禁止されたか、何か理由があると思うんですね。川が汚くなったとか、ちょっと思い出してください。誰かお話し聞えませんか。

はい、お願いします。

○杉浦 平戸橋に住んでいて、今年69歳、再来月で70歳になりますけれども、私たちが小学校のころは、その平戸橋の下流で泳いでいました。川で禁止になったのは、やっぱり学校にプールができてから。と同時に、ちょうど砂利を採って、川が真っ白になりました。それでもってプールができましたので、さっき新見さんが言われたように、死者もたくさん出たから禁止された。平戸橋地区の矢作川で水泳大会をやったというよりも、枝下用水が流れていますので、枝下用水でやった記憶があります。

○阿部 ああ、そうですか。今、禁止されたというのは、誰に禁止されたんですかね。

○杉浦 それは、たしか学校だと思ひますけどねえ。

○阿部 子供だと、よくわかんないですよ。

○杉浦 そう。僕らのころは、泳げないやつは先輩が指導して泳げ

るように順番にやっけていまして、ここに見える山田さんなんかには私は教わったほうですけど、あの瀬の下で救助訓練までさせられたんですよ。溺れた人を助けるときには、「おまえ、あそこへ行って溺れたふりしろ」、「おまえ、助けに行け」って。溺れ役の子に「そばへ近づいてきたら抱きつけ」と、こう言うわけです。溺れる人間は藁もつかむ気持ちで抱きつくわけですね。そうすると、二人とも沈んじゃうわけですよ。両方とも泳げますから問題ないですけど、次に行くやつに、「そばまで行くな、ああなるで。行ったら、飛びつかれん範囲で一遍止まれ」と。「近くへ来ればちょっと安心するで、そのすきにほったたを一発ぶん殴れ」と(笑)。「すると、一瞬ひるむ。そのときに片方の肩へ手を掛けて、ひゅっと上へ上げてやれ。息ができるで安心する」と。それでどっちかの肩へつかまらせて近い岸の方へ流れに沿って泳いでいけと。

あるいは、「行ったら、潜って足をつかまえて上へ上げてやれ」と。そうすると息ができるから。山田さんが先生で、実地訓練はこっちですよ、「行け」と(笑)。

○阿部 ああ、なるほど。びっくりしました。ものすごくリアルな人命救助の方法ですね。共倒れにならないための。

○杉浦 そう、そう。5年、6年生ぐらいの泳ぎのうまいやつに行かせて、下級生のみんなどは見ておるわけですね。本当にやっぱり沈むんですよ、一瞬両方。ちょっとびっくりしますよね。

○阿部 やっぱり6年生が下に教えていくという、そういう時代だったんですね。

○杉浦 いえいえ。山田さんは私より6つも7つも上ですからね、高校ぐらいだったですね、そういう人たちから教わりました。

○阿部 あっ、そうか。小学生に高校生ぐらいの子が教えてくれたっていう時代なんですね。

○杉浦 そうです、そうです。

○阿部 なるほど。ありがとうございます。拍手をお願いします。(拍手)

何かちょっとびっくりするぐらいリアルな話ですね。

じゃあ、どうなんでしょうね、話をどこに持っていかうか、ノープランで今日はここに来ていますので、いろんな川遊びの時代があった、でも、今は誰もいなくなっちゃった。誰もいないわけじゃないですよ、まだまだ遊んでいる子供たちはいるんですけど、目につかなくなってきた。この間というのは、どこがきっかけなんだろう、何が原因だったんだろうということころをちょっと聞いてみようかなと思ひたんですけども。

はい、お願いします。

○小寺 ちょっとした意見ですけども、一つは、今の意見を聞かせてもらって、食料が関係あると思うんですけど。川遊びも、小魚捕ろうと、一つは食の変化。

○阿部 昔は、捕った魚をみんな食べて。

○小寺 そうです。だから、みんな命をもらうんだから、その分だけやっぱり感謝して生きてきたと思うんですけど、それが今はないんですね。

それと、そういう遊びもない。だから、今の子供に川遊びしろと

言っても、ただ水に親しむだけじゃなくて、自然を愛するどうのこのより、やっぱり食生活も関係するんじゃないかなって思いますけど。

○阿部 食生活ですね。魚をもっと食べた時代というのがあったんですね。一時期、「矢作川の魚は食べられないよ」、みたいなことを言う人が多かったですけども、最近はどうでもないですね。

では、ちょっと聞いてみましょうか。矢作川の魚、この1年ぐらいの間に矢作川の魚を食べたことがある方は見えますか。(挙手あり)

はい。手を下ろしてください。

もう一回聞きます。アユを除いて、食べたことがある方。(挙手あり)

ああ、何かうれしいな。何を食べたんですか、大きい声で教えてください。

○会場 シラハエ、ニゴイ、ウナギ。

○阿部 その辺ですか。ナマズとか、いろんなものを食べてるんでしょうね、きつとね。

ちょっと、子供がいたよね。あそこにメガネをかけた少年がいる。ちょっとマイクをお願いします。

君は、最近、矢作川で魚を捕ったりしたことありますか。

○松元 はい。

○阿部 食べたことはないだろう。

○松元 あります。

○阿部 おおっ。拍手。(拍手)

じゃあ、最近、矢作川で何食べた。

○松元 オイカワです。

○阿部 オイカワ。

○松元 はい。

○阿部 オイカワだけ。

○松元 いろいろ。

○阿部 いろいろ(笑)。それは自分で捕って食べたんだ。

○松元 はい。

○阿部 すごいなあ。はい、ちょっと名前を教えてください。

○松元 松元紀大です。

○阿部 松元君ね。ありがとうございます。

今でもやっぱり食べている子はいるみたいですね。

はい、じゃあ、君も聞いてみよう。

最近、川で何か捕まえましたか。

○中村 最近、川で、えっとね、去年釣りに行ったんだけど、ブルー

ギルがいっぱい釣れた。

○阿部 ブルーギルがいっぱい釣れた。食べちゃった。

○中村 食べたんじゃない。埋めた。

○阿部 埋めたか(笑)。それは、お父さん、しっかりしてるな。

○中村 あと、食べたやつもねえ、ニゴイと、フナと、ボラとか。

○阿部 君、何年生だ。

○中村 3年生。

○阿部 魚の名前よく知ってるなあ、すごい。ここにいるおじさんたち、アユしか知らない人、いっぱいいるぞ(笑)。

ありがとう。はい、拍手。(拍手)

何かこうやって、今でも細々とかもしれないんだけど、川で魚と遊んでいる子供たちがいる以上、もっと遊べる状態というか、そういう環境をつくってやりたいなという気持ちにもちょっとなりますよね。

じゃあ、これ、実際どうなんでしょう、皆さんの中には、子供が川で遊んでいる景色っていうのは、もう一回取り戻したいっていう気持ちはあるんでしょうか。これは大事なところですよ。どうでもいいと思う方も見えますからね、世の中には。別に、川で子供なんか遊ばなくなっちゃって生きていけるじゃんっていう話もあるんだけど、ちょっと皆さんに聞いてみます。やっぱりおらが矢作川には子供が遊ぶ場所があって、夏に覗くと、みんな遊んでいるといいよねあって思う方は、ちょっと手を挙げてみてください。(挙手あり)

あつ、たくさん見えて、ちょっと安心しました。

去年、僕、話を伺っていて、70、80、90歳までいく先輩方が、ものすごくうれしそうに昔の話を、子供のころの話を、もう、昨日のことかのような顔で話すんですね。それを聞いていて、ああ、この人たち幸せだなあって。一生持っていていられる思い出というか、宝物というのが、しかも、リアルな話を持ったまま死んでいけるって、これはすげえ羨ましいなあと思いました。だから、川で遊んだ経験じゃなくてもそういうものというのはあるのかもしれないけれども、やっぱり川というのはちょっと特別な場所のような、さっきの川端さんの話を伺っていても思うんですけども、いろいろなものがあります。自然とか生き物に対して一番アプローチしやすく、一番全身で感じられる場所のような気がして、つい僕なんかも、やっぱり「川」と思ってしまうんですけども。さあ、どうやったら子供のいなくなってしまう、少なくなってしまう矢作川に子供たちが戻ってくるができるんだろうか。反対に、若い人たちが遊ぶことができるんだろうかと、ちょっと考えてみてくださいませんか。いろいろな方法があると思います。

じゃあ、今お子さんがいて、川遊びに時々行くよという方、見えますか。そういう世代の方。(挙手あり)

それじゃ、ちょっとお伺いしたいんですけども、今、矢作川で遊ぼうと思ったときに、何か困ることとか、足りないものとかありますか。違う話でも結構です。

○中村 僕も川遊びが昔から好きで、子供と一緒に、子供をだしに遊んでいるタイプなのでいいかなと思うんですけど、やっぱり全然遊ばない子供が親になったときに、実際、その子供を連れて遊びに行けるかと思うと、そういうのはちょっと怖いなと思いました。最初、川端さんのお話を聞いていても、子供のころ川で遊んだとい

う経験があれば、多分その子供が大人になったときに、また子供をというサイクルができると思うんですけども、一度そういうのが切れてしまうととても恐いなと思うので、川遊びをする大人も育てることが大事ななと思いました。

○阿部 大人も育てることですね。一つお伺いしたいんですけども、同世代の方で川遊びをやってみる方って、まだたくさんいるんですか。

○中村 たくさんはいないですけど、確実にいます。やっぱり自然が好きな方っていますので。

○阿部 ありがとうございます。

若い世代の方で、ほかにもう少し何かご意見ありますか。

どんなことでもいいですよ。川に入る場所がないとか、車をとめる場所がないとか、何でもいいです。

じゃあ、こっちから振っちゃおうかな。若そうな人。しかも、子供がいるぐらいの。というのが、あまり見当たらないですね(笑)。

よし、内輪で振っちゃえ。山本君はお子さんが見えますが、どうですか。

○山本 僕の思いですけども、やっぱり潜って遠くが見える川であってほしいですね。

○阿部 川に潜って、水が透けてるってということですね。

○山本 そうですね。今だと2mぐらいですよ。これだと魚も逃げてしまうことがあるので、そうじゃなくて、潜ったら水族館みたいな。

○阿部 景色が見えるような川であってほしい。

○山本 はい。というところで。

○阿部 はい、どうぞ。

○藤澤 足助町の巴川の上流域の綾渡町にいます、藤澤と申します。

僕も子供のときに、小学校6年生ぐらいまで、御内の川に小学校みんなで山を越え、谷を越え泳ぎに行ったときに、川で泳いだときに、魚が顔に当たってくるぐらいいっぱいいたんですよ。自分ところの山にも、カナギ(広葉樹)がいっぱいあった。それからうちの親父たちが木を切って、スギとかヒノキを植えてしまっ、田んぼでも化学肥料とか農薬の汚染で、ウナギがいるぐらいのときだったんですけども、小さいときには、何でこんなところにウナギがおる、何で死んじゃうのかなと思ったんですけども、今考えると、すごい怖いことだったんですよ。僕も今、子供がアトピーになったりして農業にちょっと目覚めてしまっていて、もう一度この時点でやっていかないといけないということで、竹の作業も矢作川森林塾の方と一緒に取り組んでいる最中なので、農業も林業も全部かえていかないと、もとの形に戻れないので、ここでぜひ皆さんに食のあり方を一遍ご検討いただきたいと、よろしくお願いします。

○阿部 ありがとうございます。こういう話というのは、広げていくと、どこまでもどんどん、どんどん広がっていくし、そういうことも大事かと思えます。

ちょっと今回は、どこへ話を持っていくか、かなり今、僕は焦っています。話の落としどころというか(笑)。

どうしようかな。さっき水泳大会の話がありましたよね。川でみんな遊んでいた。一旦それがなくなったということなんですけれども、ちょっと話が戻って申しわけないんですけども、新見克也さんが、『月刊矢作川』の水泳大会というのがあったんですけども、恐らくそれが最後の水泳大会じゃないかなという気もするんですよ。学校なんかは早々と禁止を出しているし。その辺のところ、新見幾男さん、その当時の話をちょっと、何でそれをやったのかという話から終わりまで、聞かせていただいけませんか。

○新見 さっき話したのは息子ですけども、あれがチビのときに川へ連れていって、『月刊矢作川』という雑誌を第100号まで出して終わってから、8年かそこら出しておったんですけども、その初期の頃に、我々のように子供の頃からずっと矢作川で育った人間達がまだ生き残っておって、「やあ、水泳大会やるか」ということで、つけた名前が「泳げる川を返せ 矢作川水泳大会第1回」というのを……

○阿部 ちょっと待ってください。泳げる川を残せ……

○新見 「返せ」。

○阿部 返せ水泳大会ということは、泳げない川だったんですね、その当時。

○新見 あんまりきれいではなかった。そんな泳げないほど汚くなかったけれども、一番は、禁止になっておったことじゃないかな。

○阿部 やっぱりそうなんですかね。

○新見 それと、ここらは、僕が子供のころは来なかった。2kmぐらい下流の梅坪という集落の出身ですけども、これだけ離れていると外国と一緒に、怖くて来れなかった。石をぶつけられるし。

○阿部 ああ、そういう意味で怖いんですね(笑)。

○新見 外国人扱いだった。梅坪に住んでおって、そこに籠川という案外大きな支流が入ってくる。そこが僕の遊び場で、小学校2年生ぐらいから本流へ出て遊んだ。5年生ぐらいまでは、夏は学校へ行かずに、大方川におって、たまたま学校へ行くと、「やあ、新見、よう来た、よう来た。ちょっと待とれ、帰るなよ」と。それがアイチ先生という先生だけでも、「おれは、おまえが休んでおる間に、あったことみんな教えてやるで、ちょっと残とれよ」ということで勉強を教えてくれた人でありまして、僕は、夏は大体川におって、冬は山におったからねえ、普通の子じゃなくて、あんまり学校へは行かなかったんですけども。そういう時を経て、川や魚よりも女性のほうが好きになった期間が途中で10年ぐらいあるんですけども、それを除いて、また川へ復帰しまして、後期高齢者に昨日なったんですけども、まだ川のつき合はずっと続いているおって、今、裕さんたちと一緒に竹藪の整備をやっておって、10年ぐらい若いときに離れただけで、何せ、川から離れたことがないんですけども。

○阿部 ちょっといいですか、さっき『月刊矢作川』で水泳大会を行ったんですけども、どんな感じでやったんですか。

○新見 『月刊矢作川』で、その雑誌で呼びかけたからね。

○阿部 場所は、どこだったんでしょう。

○新見 ここから3kmぐらい上流の広瀬です。人がたくさん来てね。

○阿部 何人ぐらい。

○新見 100人は超えとったんじゃないかなあ。

主催者側として、一番みんなが怖がっておったのは、「いや、誰か死んじゃったらどうするだ」と。それが怖かった。地元の舟に乗るとるアユ釣りの人が、僕らが頼まんに番をしてくれて、ロープを張ってくれたけれども。実は、死ななかつたんだけどね、そのロープをくぐって下へ流れちゃった子がおって、後で知って、怖いなあということだね。地元の子供は川で泳いでおったからね、「ああ、あいつらとうはええなあ」と思っただけだけれども、ほうぼうから来るでしょう、大会だから。あれが怖くてね、2年やって、怖くてやめたと思う。

○阿部 ああ、やめたのは、やっぱり事故が怖くてやめたということですか。

○新見 はい。

○阿部 すごくわかりやすい話です。

○新見 主催者というのは怖いんだよね。当時は保険も何もないし。

○阿部 だけど、その怖いことを承知でやった勇気に、本当に拍手を送ります。(拍手)

でも、そんな形の水泳大会、今はどうでしょう、例えば復活させるということは可能なんですか。すごく面白いとは思いますがね。ただ、今のよういきなり深く流れるところへ「みんな集まれ」って言ったら、多分半分ぐらいの子供は流れちゃうでしょうね、今。100人入れたら50人流れちゃうって。それを知らねえやっというわけにはいかないで。

○新見 子供の大会じゃないからね、大人も子供も一緒に泳いだ。

○阿部 大人と子供と一緒にやる大会ですね。わかりました。

でも、今でもやれないことはないんじゃないかなという気はするんですけど、どうなのでしょうね。何かご意見のある方、見えます。

○梅村 今から、10年くらい前だったですかね、豊田の教育委員会の教育長のほうから、「拳母小学校の子供を矢作川で泳がせたいと思うがどうだね」という相談を受けたことがあります。結論的には、恐らく下町のお母さんたちは、今の矢作川の汚れ、ちょうどあのころO-157が話題になっておったときですね。だから、へたに教育委員会が主催でやるというようなことになると、それこそ旗を立ててお母さん方が市役所へ訪れるんじゃないかという、そういうことがありました。その当時の教育長さんも、「まあ、教育委員会としては、この際はやめます」と。そういうことがありました。今から10年、もうちょっと前かねえ。

○阿部 いや、今からたった10年前に教育委員会がそういった子供を矢作川で遊ばせようなんていう話があったことに、ちょっと僕は驚いています。ありがとうございます。

子供たちが川で遊んでいた時代があって、そこから離れていった時代というのは、本当にいろんなことがあったんですよね。理由は一つじゃなくて、恐らく高度経済成長期で川が汚れて、小川がどんどんつぶされた時期に学校にプールができて、子供も子供で、ゲームができて、おもちゃができて、いろいろな遊びが入ってきて忙しくてしよがなくなつた。昔のように、学校から帰ったら、とにかく「うちにおるな」と言われて川へ行っておればよかった時代ではなくなつてきた、そういういろいろな要因があって川から少しずつ離れていってしまったところはあると思います。

その中で、今の時代にもう一度子供たちを川に呼ぶ方法というのは、やっぱりさっきもあつたように、流れていって死んでしまうという危険、これがやっぱり大きいんでしょうかね、どうなのでしょう。僕があんまりしゃべっちゃうといけないので、誰か。

○新見 当時からしょっちゅう死んでつたよ。

○阿部 当時からしょっちゅう死んでましたよね。死んでたよねって言っちゃいけないけど、実際そうなんですよ。昔は、「あそこで今年は何人死ぬかな」、「あつ、また一人死んだ」って、当たり前なことだったんだけど、それに対する世の中が変わつてきましたよね。

○新見 子供がたくさんいたからね。

○阿部 そう。昔は、5人おつたら、1人ぐらい死んでもいい時代だったですかね。今はもう、大事な、大事な子ですのよね、ちょっとその感覚も変わつてきたように。

○藤兼 私、4月から愛知県の河川課のほうに来ることになりました。藤兼と申します。よろしくお願ひします。

ここに来る前は、実は河川環境管理財団の子どもの水辺サポートセンターというところで働いていました。まさに今の議論、子供たちを川にどうやって戻していこうかということ平成14年からずっとやってきた組織のセンター長というのをやっていました。

やはり、子供たちの安全が第一なので、この時代、一人ぐらい死んでもいいやというわけにはもういかないと思います。ですから、どうやって子供たちを戻すかという、僕らがやっていた活動は、後ろの展示パネルの写真にもありますけれども、やはりライフジャケットをきちんと必ずつけよう。ライフジャケットは、シートベルトと一緒にだ。絶対つけようというような運動をやっていました。また、低体温症といって、山で死ぬ方もたくさんいましたけれども、そういう低体温症になっても危ないので、ウエットスーツも着ましようというようなこと。ライフジャケットは、この子どもの水辺サポートセンターというところは無料で貸し出しをしています。大事なものは、ライフジャケットとかウエットスーツ、ヘルメット、あとスローロープといって、投げるロープ。ポリエチレンでできた水に浮くロープというのがあるんです。川で遊ぶときの道具なんですけれども、これも貸し出ししています。こういう道具をきちんと用意して安全を必ず確保するというのが大事だと思います。

また、川に学ぶ体験活動協議会というのがあって、そこが川の指導者という資格を付与しています。講座がきちんとあつて、二泊三日の講習を受けないと、川で子供たちを遊ばせることができないという技術を学んでもらうという講習会もやっているので、やはり子供たちを川に戻そうと思つたら、そういう道具をきちんと用意したり、技術を身につけて、そういう大人を何人かきちんと配置するというような計画を立てて、お母様方に、安全ですよ、安全をきちんとアピールしないと、今の子供たちは川に戻つてこないと思うの

で、そういうことを一生懸命大人が提供するのが大事なんじゃないかなと思います。

○阿部 安全ですね。ありがとうございます。
はい、お願いします。

○清水 藤兼の部下の河川課の清水です。

今の話は、それはそれで大人が用意すべきことかなとは思いますが、私は、去年も言いましたけれども、全然川で育っていないんですね。知多半島で育って、ほとんど川という川がないところで、川といっても排水路のような、雨が降ったときに、どおと流れる滝のようなところ。川の原体験みたいなものがなくて、遊ぶといえればため池だったんです。ごくまれに行く岐阜の山のほうで川が楽しいなと思ったのが、私がこの古川に始めて来たときもそうですが、まず水辺に近づけるすぐいいところ。でも、ここは入ったら流されそうなので入りませんけれども、ちょっと石をひっくり返して遊びたくるところじゃないですか。まずこういう場所があるのが必要だと思いますし、でも、行ったら何かありそうという、わくわく感がなくて、どっちみち何を用意しても人って来ないと思うし、子供は遊びに来ないので、じゃあ、わくわく感ってどうやっていいかという、自分がため池に何で入ったかという、ちょっと覚えがないんですけども、でも、何かあそこにあるという、そこに誘う、例えば道から入る、その入り口があるだけで、多分子供は寄ってくるのかなという気がしなくもないかな。あとは、例えばいきなりこういう本川だと、流されるというか、危ないなと思ってしまいますので、それこそ、支川のもうちょっと穏やかな流れのところを下りれるような場所があったら、私が小さいころだったら、どんどん下りて、とりあえず一人でも入ってみちゃうかなという気はします。

○阿部 ありがとうございます。わかりやすいですね。子供が川に行きたくるような雰囲気の中で、行っても危険でない場所ということなんですね。その川遊びというのを復活させるには、その危険をなくさなくちゃだめなんですかね。どうなのでしょう。実は、僕は子供と川遊びというのは、毎年、ずっと10年以上続けてきて、年間で何千人という子供たちと遊んでいるんだけど、さっき言われたように、やはりライフジャケットは必ず着用させます。それはやっぱり死んでもらっては困るから。ただ、何が何でもライフジャケットを着せておけよということはありません。だって、ライフジャケット着てると潜れないもん。一番面白い遊びが奪われるんですね。でも、やっぱり遊ばせたいから「とりあえず着とけ」ってやるんですけどね。脱いだり着たり。それを判断できる体験をさせていくことが実は大事なことで、危ないものを全部大人が奪っちゃう、絶対安全な形にしちゃうんじゃないか、何が危険かを教えてやるのが大人の務めかなというふうな気はしているんですけども。ごめんなさい、僕がしゃべっちゃって。

○永田 豊田市に今は住んでおります、永田といいます。もともと矢作川で育った人間ではありません。今のご意見で、子供をどうやって川へ戻すかというときに、今、夏丸さんがおっしゃったように、すべて安全にするというのは、僕はやっぱり現実的ではないし、できないだろうと思います。やはり大事だと思うのは、僕もそうだったんですけども、僕も川の経験というのはあまりなくて、だけど、子供が大きくなってきて、「川で遊びたいな」と言ったときに、川へ連れて行って遊んでいるうちに、よくわからないから、すごい流れの急なところへ着いちゃって、子供が流されかけて、必死でその子供を抱えて一緒に流れていって、親は血だらけになりながら何と

か子供を守ったとか、そういう経験はあるんですけども、それはやっぱり親のほうが経験不足なんです。子供のときに遊んでないから。先ほどお子様連れの方がおっしゃったとおりだと思って、ところが、小さい子を持っている親の世代って、遊びたい人がいっぱいいるんですよ。だけど、やり方がわからない。そういう親たちに、どうやって川遊びというのをやるんだよとか、どういうことをやると楽しいよというのを教えてもらうようなきっかけというのがなかなか見つけれないんです。見つけれられた人はハッピーな人なんだけれども、その辺を与えてあげると、もっと遊びに来る人たちが増えるし、僕は、子供の安全というのは、やっぱり親が見なきゃいけないと思うので、いきなり子供だけが来やすいところをつくって、子供だけが事故に巻き込まれたりしたら、それは何していたんだという管理の問題になってしまう。だけど、やっぱり親が責任を持って連れてきて遊んでいるうちに、こういうところは危険だ、こういうところは安全だというのを教えてあげれば、そのうち危険がわかるようになった子供たちが自分たちで遊んで、危険なところ、安全なところを見極めて遊ぶ。そういうふうになっていくというのが一番理想系だな。何がきっかけかなと思うと、そういうちょうど子育てで、子供を外に連れて歩きたい親の世代を、よくわかっている同世代の人たちが、この中にも何人かおられるでしょうから、そういう人たちが教えてあげるような活動、そんなことが展開されたら意外と川へ戻ってくる。まずファミリーで戻ってきて、そのうち子供たちだけのグループで戻ってくるということになるんじゃないかなというふうに感じました。

○阿部 ありがとうございます。

○杉本 矢作川漁協の杉本です。私も、先ほど話された新見さんたちの時代よりも7つぐらい下だもんですから、昔の名残もありまして、川で何を遊ぶかといったら、当時、私ら小学校の低学年のころだと、川で泳ぐ。プールがないものですから、物理的な話ですね。夏だったら、暑いから泳ごうと思ったら川しかないわけ。家が豊栄町だったものですから、実は渡刈まで行きまして、明治用水へしょっちゅう通ったわけ。当時は、先輩が後ろにおったら突き落とされるぐらいで、そのまま流れて行きまして明治用水へ行ったら、3mぐらいあって結構流れもあるものですから。

○阿部 あそこは深いし、流れもありましたよね。

○杉本 深いし、渦を巻いておるわけですね。それで必死になって泳いで、洗濯場みたいなところから駆け上ったという経験があります。そんなことをして、先輩の人からも無理やりそういうことで、自然に泳ぎも覚えたということじゃないかなと、そんなふうは今思っております。そういう意味で、物理的にも私らのころはなかったのが、今、プールだとか、安全面ということでそういう設備ができてしまったものですから、川で泳がなくてもプールがあるじゃないかと。だから、先ほどの先生の話じゃないですが、やっぱり安全面だということが強調されるようになったんじゃないかなと思っております。

それからもう一つは、やはり子ども会なんかでも以前に事例があったと思うんですが、子ども会で地域のボランティアのつもりで川遊びへ連れていった。死亡事故が起きたときなんかは、これは責任問題が当然出てきまして、裁判になった例もありまして、新聞なんかでも大きく出るわけですね。へたすると賠償責任から刑事責任まで追及されると。そういう事例まで出てきて新聞報道なんかをどんどんされるようになると、そういうボランティアでやっていたお母さんたちも、もうとてもじゃないか危なくて、怖くてやれない

と。そういうふうに社会の風潮もなってきたんじゃないかなと、そんな感じがします。私らが子供のころ、本当に明治用水で泳いだころは、新見さんの話じゃないですが、あいつ死んだらしいぞぐらいで、亡くなったときもそれで終わっちゃったんですが、今じゃ、九州のほうで死んでもテレビで報道されたり、あるいは新聞で出る時代になっちゃったんです。だから、昔のことと今と比較しても、ちょっと観点が違っちゃったんじゃないかなと、そんな感じがしておりますね。

そういう意味で、これから子供をまた川に戻そうと思うんだったら、違う考え方で、やっぱり昔と同じように戻そうと思っても無理じゃないかなと、そんなふうに思いますね。

○阿部 ありがとうございます。そうですね、九州のほうの水の事故が全国に流れるなんていうことは、昔はなかったですよ。隣の村の話が流れきて、お母ちゃんが、「うちの子死んじゃったけど、うちの子、ばかだから」って済んじゃうような、そんな時代だった。そこまではないかもしれないですけども、やっぱり「うちの子、ばかだから」、「ばかだから」って、僕の親なんかも言っていた記憶があります。とにかくその責任問題とかいう話になっちゃうと、ますます川から離れていってしまうだけけれども、河川管理者の側から見たときに、その責任というのはどうなのでしょうね。僕個人的には「責任なんかとってくれんでもいい」って、いつも言っている。それは、川で遊ぶのは全部自分の責任だから、責任とってくれんでもいいって言うだけけれども、いろいろ話をすると、「いやあ、責任がありますから」っておっしゃられることが多いので、川遊びに対してどんなふうに考えてみえるか、ちょっとお話が伺えたらと思うんですが。

○本守 現役の人はお話ししにくいかわかりませんので、OBとしてお話ししますが、日光川という川がありまして、非常に深い川。矢板で直立護岸。よく転落事故がありました。裁判になりました。その裁判の結論は、10歳までは親の責任。10歳以上、11、12となると、それは子供自身の責任になると。そんなふうに非常に厳しい言い方をしました。河川管理者は、怖いから川に近寄らないようにネットフェンスを張るでしょう。そんなのは破れちゃうんですよ。そして、ないところまで行って、また入ってくるんですね。それはもう管理というのはしょうがない。だから、ほとんど裁判上では河川管理者の責任にはなっていない。亡くなられた方にはかわいそうだけれども、私自身は、それが常識かなと思っています。

○阿部 責任にはなっていないんですね。

○本守 自由使用の原則ということでございました。

○阿部 ありがとうございます。川は、やっぱりみんなで使う、自由に使うものであるから、自由であるからこそ責任は自分で持たなさいよという、それは正しいことなのかなというふうには思うんですけどもね。
はい、お願いします。

○梅村 私は、矢作川のほとりで生まれて、これで80年ぐらいになるわけですが、今、阿部さんの話ではないですが、子供をどうやって川へ戻すかということですが、今、数人の人からいろいろな意見が出まして、そのとおりだと思いますが、私は、結論的に言えば、矢作川ぐらいの規模の河川の場合は、アユがよく釣れるような状態になったら子供も川へ遊びに来る、魚捕りに来る、そういう考え方をしております。

アユがよく釣れるか釣れないかということは、川の水質のいいとか悪いとかのパロメーターだろうと。アユがよく釣れれば、ほかの魚も増えてくるだろうと。阿部さんも楽しんで、子供連れで川へ行っておられるわけですが、アユが釣れないようになることは、アユ自体の理由もあるわけですが、アユを取り巻く環境が少しずつ悪化するという、そういうことがありますので、私は、アユがよく釣れれば、まず大人が川へ近づいてくると。大人が近づいてくれば子供も来ると。子供が来れば、魚の捕り方から、泳ぎ方から、遊び方から、いろいろなことが親から子供に伝わっていく、大人から子供に伝わっていくと。ちょっと時間がかかるわけですが、私は、それが本当に子供が川へ近づく方法ではないかと。

今日は、矢作川研究所の皆さんも矢作川漁協の皆さんも大勢来てお見えになりますが、このところ、もう十何年ぐらい矢作川のアユをどうやって復活させるかということで努力しておみえになりますが、結論的には、こうすればこうなるというところまでいっていないわけです。これからも努力されて、何とか矢作川でアユがよく釣れるような状態になることが、子供さんが近づいてこられることになるのではないかと。ちょっと時間はかかりますが、それが私は一番近道ではないかと、そんなふう感じております。

○阿部 ありがとうございます。今、先生に上手にまとめていただきましたけれども、僕は、ちょっとそうは思っていないからね(笑)。何でもアユで片付けちゃうと、僕の知り合いのアユ釣師は、絶対子供はアユ釣りに連れて行きません。アユ釣りができなくなっちゃうから(笑)。

はい、すいません、お願いします。

○会場 私は、この上流のほうで、矢作川上流というところと岐阜県もあるんですが、中流域に住んでいて、昨日も実はアユ釣りに行ったんです。アユ釣りに行ってみると、うちの裏で勘定してみると、十四、五人の人が来ていたけれども、地元の人で入っていたのは僕一人だけで、あとは全部よそから来られているという状況でした。

○阿部 その方々は、釣りにみえた方ですか。

○会場 アユ釣りの解禁なものですから。

○阿部 アユ釣りにみえた方が、よそからみえた方ということですね。

○会場 そう、そう。地元の人でも、なかなか川へ近づきにくくなっているという状況なんです。それは、その人の遊び方なり趣味がいろいろあるものですから、それはさておいて、私もこの辺に座っておるのは、上流3支部といまして、矢作川の小渡支部と浅野支部と笹戸支部で、子供に夏、たった1回だけれども、矢作川釣り教室というのをやっています。でも、人口が人口なものですから、小学校で全部合わせても30人ほどしかいない地域です。人寄せをしてもうまくいきませんけれども、一日だけ釣り教室をやった、30人ほど集めて、エサのつけ方からハエの釣り方から教えているんですわ。だから、これはささやかでも続けていけるといいなというふうに思っていますので、ちょっとご披露しておきます。

○阿部 ありがとうございます。

はい、お願いします。

○広浜 現役の県土木の所長をしております。今、大先輩からいろいろ心配していただきましたけれども、管理という点では、我々は

管理瑕疵がないように、危険をなるべく早く察知しながら対応しているということですが、それはそれとして、例えば先ほど言いましたように、川だけじゃなくて、子供は今、海でも、私、蒲郡の海で育ったんですけども、海でも泳がないし、うちの前の神社でも遊ばない。いわゆる川ガキを集めるガキ大将みたいな者が全然いないわけですよ。それで、ふと思うと、今ここにみえる川ガキのOB、現役の方も、楽しい思い出があったときは、実はガキ同士の中で一応ルールとか危険とかいうのを体験しながら、経験で、「あのときはよかったなあとか、あのときは危なかったぜ」というところがあってこそ、そういうのが思い出になるわけですね。私も少年野球のコーチをやりましたけれども、いつも子供の世界に大人がいて、いつも指導している、管理しているというところは、恐らく大きくなってから子供同士のルールだとか痛い思いとか、そういうことを考えると、本当にそれでいいのかと。所長という立場を置いておいて、親として、いつも親が何か指導しているとかやっているというのは、大人になったときに、そういう思い出でいいのかなと実は思っています。

だから、少年野球のコーチをやっている、優勝とか勝負にこだわったりとかいうのがあるんですけども、実は、子供同士の中で、からっとしたぶつけ合いの中で、そういう危険な思い出が大きくなって、このように楽しい思い出となるのではないかなと思います。もちろん管理はしっかりやりますけれども、子供の世界に入りますと、いつも大人がいて安全と。川から守る安全と川を守る保全というのがありますけれども、素直に思うと、そういう点もあるんじゃないかなとは思うんですけどもね。

○阿部 そうですね。やっぱり世の中が変わってきたということは大きいかなと思います。よくテレビの映像で見る吉田川、郡上八幡の橋の上から飛び込んでいる場所がありますけれども、あそこなんかでも、やっぱり大人は誰もいない。子供だけで遊んでいる。でも、やっぱり1年から6年までみんないて、6年生は腕組みしながら小さい子をずっと格好よく見守っている。僕はそういう姿を見ました。1年生の子は、もうこのぐらいのところまで入って、深みに一気に飛び出して、「キャアー」って言って戻るわけですよ。それを何回も繰り返して遊んでいる。どおどお川が流れている。その後ろの5mぐらい離れたところで、6年生が二人でこうやって横目で見ながら話をしている。いざというときには飛び込めるようにと。そういう子供同士の関係というのがあるから、そういう自由な遊びというのができたんでしょうね。

さっき、こっち側で手が挙がりませんでした。よろしいですか。

○川端 阿部さんがそのときにもう言ってくれちゃったので。アユを釣っているところで、子供はバシャバシャできないじゃんという(笑)。

○阿部 そうですね。特に多摩川なんかは、まさにそうですね(笑)。

○川端 もう、それは葛藤がすごいんですよ。お互いにけんか状態になって、カヌーをやりたい人がいて、釣りをやりたい人がいて、水遊びしたい人がいてという、三つ巴、四つ巴の戦いがあるって、暗黙のルールがあるような、ないような、ピリピリしていることがあるんですよ(笑)。

○阿部 そういう状態なんですよ、多摩川のほうは。

○川端 だから、人口密度の問題でそういうことが起こるので、矢

作川ではどうかわかりませんが、すべての子供が水辺に戻ってくるべきではないと僕は思うんですね。小学校のときからサッカーが大好きな子は、サッカーをやるだろうし、野球をやるだろうし。でも、何か生き物が好きだぞというふうな子が、小学校のころ、最初は親に連れられて来る。僕は、お父さんのほうが鈍だと思えますね。お父さんのほうがちょっと無謀に入って行きますからね。安全性とかそういうよりも、さっき「子供をだしにして」という、いい表現が出てきましたけれども、まさに自分自身、さっき言い忘れた言葉として、子供が生まれると、自分の子供時代を生き直すような感覚がある。僕は昭和39年生まれ、1964年生まれなんですけれども、高度成長期の子供って、親にかまってもらっていないんですよ。おまけにガキ大将システムも崩れかけているので、そのダブルパンチで自分の経験がない親が子供時代を生き直すというのが、ちょうど僕の世代。ひょっとしたら阿部さんなんかその世代なのかもしれないですね。だから、今の親が子供とかかわる中で川に近づくと、先ほどあちらの方がおっしゃっていたプログラムというのは、すごくあり得ると思うんですけども、多分そういうのが好きな親が、そういうのが好きな子供に恵まれたときにうまくびたつとはまって川にやって来るぞと。そのときに必要だと思うのは、アユが遡ってくる環境というのは必要かもしれないけれども、僕的にいうと、ガサガサできる場所が欲しいなということですね。

○阿部 ありがとうございます。

はい、お願いします。

○裕 私も、今は川がすごく大好きなんですけれども、川端先生がおっしゃったように、子供時代を生き直す。やはり多摩川の近くだったんですけども、子供時代に一度も川に入るなんていうことはなかったんですけども、自分がこちらにお嫁に来て、矢作川のすぐ近くに住むようになって、子供、それも男の子が二人生まれて、「うわあ、川に行きたい。川で遊びたい」って言って、もう、すぐ近くの川に行きたくて、遊ぶといっても危ないので、せいぜいメダカを捕ったり、ちょっと足を濡らしたりする程度だったんですけども、やっぱり一番子供を川に連れて行くのは、子供を育てている親。本当は、子供が子供を教えるといいんですけども、なかなか今はすぐにそれができないかもしれないので、何か親子で楽しめるイベント、親が川に近づくと、「じゃあ、来週、ちょっとうちの家族だけでも川に行ってみようか」というふうになるんじゃないかなと思いますので、子供と川をまず結びつけて、親子で遊べるような、初めはイベントでも、もし、ガサガサができればもっといいかなと思いますけれども、そういうような体験をまずさせてあげられるということが大事なかなと思いますけれども。

○阿部 ありがとうございます。

○溝口 私は豊川の主流の下流側に住んでいる溝口と申します。今日は川を越えてまいりました。実は、先ほどから出ていた矢作川流域懇談会の事務局をしています。今お話を聞いていて、同じこの議論を山でもやっています。そして今、川でも始まります。そして、海も同じことを言っています。海に入りづらくなった、アクセスが悪い、上流からゴミを流してくる、子供たちをどう遊ばせるんだとか、漁民は生活できないと。

一つの例を言いますと、裕さんたちがこの流域圏の中も含めて、豊田には、実はガサガサをやるのはあんまりないですよ。豊田スタジアムの前のあたりから鵜の首ぐらいい向かって国交省が恵南豪雨の洪水をちゃんと流せるように川の底を掘ったんですね。そのときに大変市民の方々、研究所の方々、市も含めて来ていた

だいて、実は、水遊びができる水辺をつくったんですよ。3月にでき上がって、アユの稚魚が結構入ってきました。漁協の方は、多分そこで魚を捕るだとか、アユを捕っても、子供たちは一切無料でいこうと。将来の釣り師を育てていこう、そして、環境も守りながら、ガサガサのできるどころが実はできてきたんです。危険問題、安全問題、そして、親の問題、教育の問題、そういうものも含めて今、実は豊田スタジアムの前で実例がもう出てきています。この問題は、地区と歴史と流域全体からの議論にならざるを得ないんですね。ですので、山、川、海で議論を始めていますので、ちょっとPRをさせていただくと、皆さんの資料の中に流域懇談会の加入書も入っています。ぜひ書いていただいて、皆さんのお知恵、意見をいただきたいと思います。行政も国から県、市町、学識者まで全部入っています。同じテーブルで議論します。ぜひまたこういうご意見を聞かせていただけたらなと。それをやるのが解決に早いような気がします。すいません、貴重な時間ですが、よろしく願います。

○阿部 ありがとうございます。

そろそろ5時になってしまいますけれども、まだ何か言い足りないという方。

○新實 ごめんなさいね、何回も。

私のところでは、水生何とか研究会というのを毎年やっていたんです。研究所の先生を講師に招いて、ガサガサをやったり、つかみどりをやったりなんかしていたんですけども、子供さんがだんだん少なくなっちゃって、それをやっても人が集まらなくなりました。何でかと思ったら、親御さんが、もう川は汚いものだというふうになっちゃったわけですね。要するに、矢作ダムができてから、あれが昭和40何年ごろですか、それから川の水がほとんど上のほうは来ないですね。それから、第2発電所ができてから、いつ水を出すか、1日に2回も3回もサイレンを鳴らしたりなんかして、やるところがほとんどないです。それで、川の水は発電所のものだというような、どうもそんなような感覚になってしまっているみたいですね。親御さんのほうが子供を連れて行って川で遊ぶなんていうことは、もうほとんどやらないようになってしまったというようなことで、今年は、矢作川研究所さんには申しわけないですけども、それをやめたらどうだという話になってしまったんです。毎年やっていたんですけども、今年は、やめになるんじゃないかと思っっているんです。ガサガサをやったり、川でつかみどりをやる、そういう場所をつくるのも大変ですけども、川は汚いところだ、川の水は汚いもの、危ないところだというふうに親が決めているようになってしまって、また、川は発電所のものだというような感覚になってしまった。そんなふうに私は思っているんですけども、そういうことで、いろいろ川で行事をやろうと思っても、人が集まらなくなってしまった、子供さんも集まらなくなってしまったという今の現状でございますので、残念です。

○阿部 何か、人が集まらなくなっちゃったという話なんですけれども、僕なんかは、今の若い世代のお父さん、お母さん方と川遊びしながらつき合っているんで、今あんまり見えないので反対に代弁しますと、誰も「川が汚い」なんて言いませんよ(笑)。今の若い方は、誰も川が汚いとは言いません。言いますか？川が汚いというのは、僕より年配の方ばかりです。だれもいません。「わあ、きれいな川、気持ちいい」って言って、大はしゃぎで遊びます。ほかに理由があるかもしれません。

ちょっと考えてみてください。本当に今の若いお父さん、お母さん方は、高度経済成長期の汚いのを知らないんです。どんどん水が

きれいになってから川に入っているんで、みんな全然汚いと思っていない。それが、僕のいつも遊んでいる実感なんですよ。だから、あんまり先入観を持たずに原因を考えたほうがいいのかもしれないですよ。

それでは、5時になっちゃいました。今日は、結論も出さずに、ノープランで始めましたので、何かちょっととりとめもないような司会になっちゃって申しわけございません。最後に何か言い足りないという方、見えますか。

最後に、僕がちょっと言い足りないの、一言だけしゃべらせてもらっていいですか。

ひとつ、川で遊ぶことについてどうしても乗り越えなきゃいけないのは危険というものなんですけれども、やっぱり矢作川で遊ぶ子供と、その大人たちは、みんな自己責任で遊ぶということを徹底するように。「何が起きても知らないよ、そのかわり安全なように努力はするけれども、事故が起きたら自分のせいなんだからね」という自己責任という言葉が浸透させていけたら、もっと自由に川で遊べる時代が来るんじゃないかなということをちょっと思いました。賛成の方も反対の方もいるかもしれませんが、そんなふうになっちゃいます。

それとあと一つ、子供のことなんですけれども、僕は子供とずっとならぶって川遊びをやっているんですけども、子供の教育がどうのこうのとか、自然環境がどうのこうのなんてどうでもいいと、僕は思っています。

さっきから子供があそこの川で遊んでいるでしょう。あれを見ると、僕なんかは、自分の子供のころを思い出します。「ああ、昔の俺がいるなあ」って。でも、同時に、あそこに矢作川の未来がいるんですよ。だから、やっぱりあの後ろ姿を見ながら、子供がいたほうが景色がいいじゃんっていう気持ちで、こんな話で終わっちゃいましたけれども、この会を終わらせてもらいたいと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 阿部夏丸さん、どうもありがとうございました。

夏丸さんと会場の皆さんのご協力で、子供が川に戻ってくるために何が必要なのか、たくさんヒントがいただけたと思います。本当にご協力ありがとうございました。

今日は、大変長い時間にわたっておつき合いいただき、ありがとうございます。これをもちまして、2012年矢作川「川会議」を終了させていただきます。